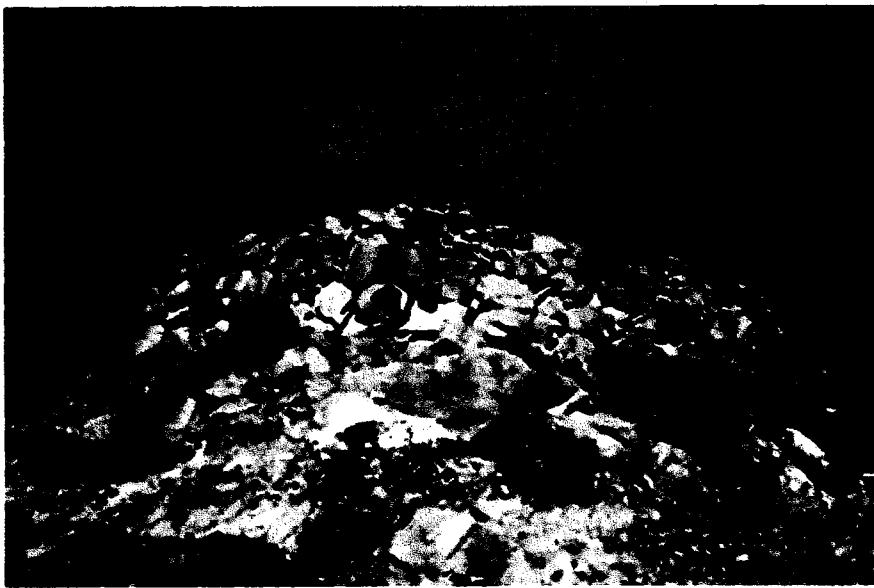


備陽史探訪の会平成21年2月例会

西播磨に備後の原景を見る

—感状山城跡、若狹野古墳、赤穂城跡を訪ねる旅—



感状山城跡 石垣

平成21年2月15日実施

案内役 田口よしゆき

主催 備陽史探訪の会

西播磨の旅へのお誘い

田口 義之

備後古代史最大の謎は尾市古墳などの終末期古墳の存在です。備後の古墳文化が後期から終末期になると最盛期を迎えるのは「吉備」の周辺に位置するから、という説がありますが、この点、兵庫県西南部の西播磨は備後と極めて似通った古代史をもっています。その象徴が今回訪れる「若狭野古墳」です。この古墳は7世紀半ばの築造といわれ、福山周辺の終末期古墳に相当します。皆さん自身の自で備後の古墳と見比べてください。

メインの一つ「感状山城跡」の石垣も注目の遺跡のひとつです。備後は戦国後期に石垣作りの城が全国的にも早めに築かれた場所で、この城の石垣と新市の相方城、備北の篠津原雲井城等の石垣と比べていただきたいと思います。「石垣は安土城から」という常識は、備後と播磨の戦国山城から崩れ去る可能性があります。さらに、今回訪ねる相生市矢野町は、「悪党」寺田法念で有名な東寺領「矢野庄」の故地でもあります。矢野庄は備後ともかかわりが深く、『東寺百合文書』に「守護山名弾正殿(備後守護山名是豊)、守護被官下見加賀守、守護使阿倍野(沼隈郡の土豪)」などの名前が頻出します。加算守などは矢野庄の代官職を競望し東寺の拒否にあっています。私たちが500年後にこの地を訪ねるのも意義のあることでしょう。また、あまり知られていませんが、最後に訪れる赤穂は福山と深い関係があります。松永塩田の開発者、本庄重政は大石氏と親交があり、重政は赤穂の製塩技術を導入したのです。それを知った上で赤穂を探訪すると、また違った見方もできるのではないのでしょうか。

スケジュール

〇8時福山駅北口発—【福山東インター】—(山陽自動車道・途中トイレ休憩)—【備前インター】—10時東有年・沖田遺跡—10時30分若狭野古墳—11時15分瓜生羅漢の里(石の羅漢・感状山城跡・昼食)~13時15分発—14時赤穂城跡(見学・トイレなど)~15時発—【備前インター】—(山陽自動車道・途中トイレ休憩)—【福山東インター】—17時福山駅北口着・解散 ※天候によって変更することがあります

◎ 集団行動です、指示に従ってください

【緊急連絡先】

田口携帯 090-5704-7814

東有年・沖田遺跡

東有年・沖田遺跡は、ほ場整備事業に伴って発掘調査された、縄文時代から室町時代にかけての集落遺跡です。発掘調査は 27, 000 m²にわたって行われましたが、広大な遺跡の多くはまだ地面の下に眠ったままです。

この遺跡公園の下では、弥生時代後期の竪穴住居 7 棟、古墳時代後期の竪穴住居 22 棟と高床倉庫 1 棟がまとまって見つかり、ムラの成り立ちや生活の様子を知るうえでたいへん貴重とされ、平成 4 年 (1992) 3 月に兵庫県指定文化財となりました。

遺跡公園は実際に発掘されたものをもとに竪穴住居と高床倉庫を復元して、この大切な文化財をいつまでも保存し、皆さんが遠い包菟の息吹に触れ、そこから地域の歴史を学んでいただけるようにしています。公園は道をはさんで南側が「弥生時代ムラ」北側が「古墳時代ムラ」となっています。太古のムラをぜひ体験してください。(パンフレット参照)

若狭野古墳

若狭野の山麓には、三段築成の方墳で特異な埋葬施設をもつ若狭野古墳がある。1980年に、西谷真治氏を主査として天理大学によって調査がおこなわれた。

それによると、最下段の外護列石は一辺約二五メートルで、三段にめぐらし、最上段部は石垣状に約二メートルに積みあげている。墳丘周囲には空濠を配している。埋葬施設は墳丘軸線に合わせて南東に入口をもつ石室が構築されている。

玄室は長さ 1. 1メートル、巾 1. 44メートル、高さ 1. 29メートルと小型で横長の平面形をしめし、四壁はそれぞれ切石風の一枚石で構成されている。玄門は袖石を立て、扉石でふさいでいる。羨道は長さ 4. 78メートル、幅 1. 48メートル、高さは羨門部で 1. 34メートルあった。



若狭野古墳の石室に類似するものとして、有年権原にある野田桐谷二号墳(祇園塚)の石室があるが、一枚石で構成していない点に差違がある。出土遺物に恵まれなかったが、若狭野古墳の築造年代は、墳丘や埋葬施設からみて、終末期古墳の墓制をしめすものと考えられる。

瓜生羅漢石仏

羅漢石仏は岩窟の中に安置されており、釈迦如来像を中心に、脇侍として、文殊、普賢の両菩薩と16羅漢が左右に並んでいます。今から400年余り前の室町時代に彫刻されたものと推定されています。中世、矢野庄時代の貴重な文化財です。

(伝説) 瓜生の羅漢石仏

欽明(きんめい)天皇の時代(629~571年)に、朝鮮の百濟(くだら)より戒律(かいりつ)を伝えるために、恵弁(えべん)と恵聰(えそう)という2人の僧が日本にやって来ました。

大連(おおむらじ)の物部(もののべ)守屋(もりや)の父である尾興(おこし)は、播磨国に流しました。そこで、2人は、矢野の奥に庵(いおり)を結んで住むようになりました。

3年後、2人は許されて、都に帰りました。

しかし、物部尾興の子である守屋は、それを認めず、大和国に流しました。その後、還俗(げんぞく)させて、恵弁を右次郎、恵聰を左次郎と名づけさせました。

今度は、播磨国の安田の野間にある牢に閉じこめられた2人は、牢番が与えた少しの粟も食わず、ひたすらお経を唱えていました。

牢番は、このことを物部守屋に報告しました。守屋は「これは私の呪っているのだ」と言って、より一層監視を厳しくしました。

2人は、「それならばこれからは、お経も唱えないし、物も言わない」と言って、無言を貫きました。それで「右次、左次とは物を言わない」という諺が生まれました。

瓜生にある羅漢の石仏は、欽明天皇の時に、矢野に流された恵弁と恵聰の2人が瓜生の岩窟入り、すべての人を仏に引き合わせようとの願いから石仏を彫ったといわれています。石仏の数は30体ばかりで、完全でない石仏もたくさんありました。数が多いので、五百羅漢といえます。

弘法(こうぼう)大師(だいし)が全国を遊行している時、ここを訪ねて石仏を刻んだとも言われています。

釈迦(しゃか)如来(によらい)・文殊(もんじゅ)菩薩(ぼさつ)・普賢(ふげん)菩薩の3像を中心に、左右に十六羅漢が配置され、釈迦の説法に聴き入る姿とか、苦行瞑想する姿であるとも言われています。

時代が下ると、羅漢の石仏は散失して、釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩・如意輪(によいりん)観音(かんのん)菩薩の4体と十六羅漢の、合わせて20体が残っています。

別な説によると、敏達(びたつ)天皇の時代(572~585年)、高麗僧の恵便が日本にやって来て、矢野庄にひっそりと暮らしていました。

ある時、蘇我(そが)馬子(うまこ)が朝鮮の百濟より石像の弥勒菩

・像を輸入して、石川の屋敷に安置して、播磨の僧侶に仏像の世話をさせました。この石像が羅漢の石仏と言われています。

江戸時代の記録である『但馬道之記』には次の様に書かれています。

龍野を過ぎて小犬丸(こいぬまる)という所から右の山手にかかる、三濃(みのう)村、瓜生村という2村の間の谷に石像の五百羅漢があります。谷間左右の石に彫り付けています。旅の僧の話に、「筑紫(つくし)の羅漢と見比べても、劣ってはいない。筑紫の石像は有名だが、ここの石像は近国の人ほとんど知らない。不思議なことだ」と言ったといひます。(相生市の伝説より)

感状山城跡

感状山城は、相生市矢野町瓜生と森にまたがる標高 301.05m の感状山の尾根上に築かれていました。規模が雄大で眺望がよく、人の手による破壊などもなく、石垣や建物跡・礎石、井戸跡などの遺構が比較的によく残されているといった点では、播磨地方の代表的な中世山城の遺構です。発掘調査は昭和60年度から3カ年をかけて部分調査を含めて実施されました。その結果、多くの建物群が発見され、曲輪群の全貌が明らかにされています。

I 曲輪

①曲輪(くるわ)は、標高 301.05m、城の一番奥の北隅にあり、姫路城などでいう近世の本丸に相当し、城のなかでも最も重要な箇所にあたります。南側斜面は地山の岩盤に自然石を組みあわせた石垣により囲まれています。曲輪内には、建物跡の礎石(基礎の石)や排水溝と思われる横一列に並んだ石組みが発掘調査により発見されています。この礎石の配列から敷地いっぱい本丸御殿が築造されていたと推定されています。

また曲輪内の中央より建物の柱穴(ちゅうけつ)が発見され、この中の底部から稲粃と16枚の銅銭、小皿が出土しました。これは、建物を建てる時の宗教的な意味を持つ「地鎮」ではないかと考えられています。

II 曲輪

②曲輪は、標高 296m、北 II 曲輪と南 II 曲輪の二つの曲輪によって構成されています。全体は石垣により支えられ、やせ尾根上を最大限に利用し、また西側は犬走りと呼ばれる3~4m幅の帯曲輪(带状の曲輪)が配置され、敵が侵入しにくいような工夫がされています。南②曲輪では、隅櫓(すみやぐら)と大規模な建築とみられる礎石群が発見されています。隅櫓は、見張りを目的とした建物であったと推定されています。また大型の建物は広間を中心に多くの小部屋をもっており、①曲輪が本丸御殿に対して、②曲輪は、常の御殿(日常生活をしている場所)の建物の可能性があり、建築の時期は柱の間隔から十六世紀末頃ではないかと推測されています。

南曲輪群

南曲輪群は、自然の尾根を利用して、六つの削平地(山を人工的に削り平らにしたところ)を階段状に造っています。この曲輪群は、大手門から本城へ侵入する敵を防ぐための要所となっています。特に注目されるのが、二段目の腰曲輪の石垣で、感状山城跡の中でも最も大きな石垣であり、保存状態もよく全長21m、高さ4.5mの規模を持っています。

感状山城跡の石垣の構築方法は、「野面積み(のづらづみ)」といわれ、自然石を30cm角のものから、大きいのは1mあまりのものを使い、一見粗雑に積み上げたような構造となっています。近世の城に見られるような隅(角)を直角にする技法ではなく、いずれも鈍角でゆるいカーブを描くことで処理しています。これらの石積みから石垣づくりの城郭としては初期のものであると推定されています。

皿曲輪群

感状山の中腹に、近世の城の三の丸に相当する③曲輪群があります。この曲輪群は約1mの石垣の段差をもち、七段で構成されており、周囲には犬走りが配置され、感状山城の特徴を形づくっています。この③曲輪群には、南北約7m、東西約8mの正方形に近い建物遺構が発見されています。この建物の周囲には方煉(ほうせん)といわれる瓦が縦に埋められていて、その内側に礎石が配列されています。これは、防火と防湿とともにねずみなどの小動物が建物内に侵入するのを防ぐため設けられたものと考えられ、食糧などを保管する倉庫跡とみられています。またこの近くには、備前焼の六甕九個が発掘調査により検出されており、大甕の底部についていたものを鑑定した結果、イノシシの塩漬肉に近いものが貯蔵されていたことが確認されています。この附近は城の台所に相当する場所ではないかと考えられています。

大手門跡と井戸跡

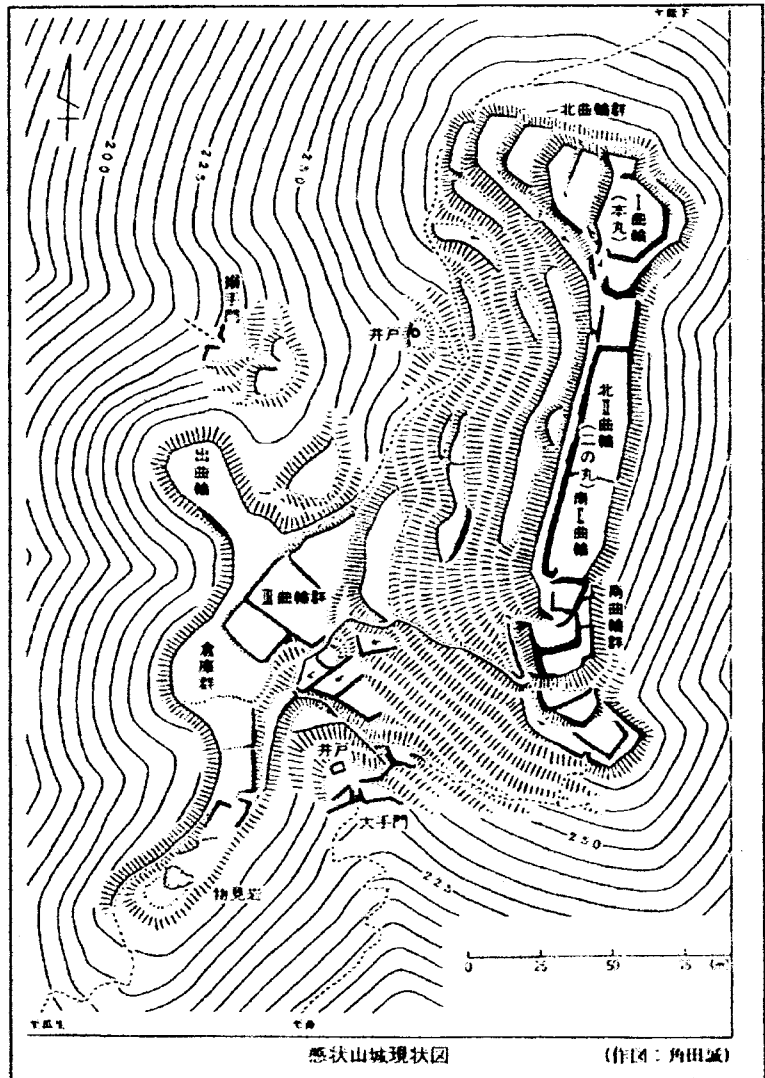
大手門は、総石垣造りで、登り口の石段を中心に鳥の翼を広げた様な形に石垣が配列され、念入りに造られています。石段は六段あり、登り口は広く上部へ上がるほど狭く造られていて、大人数で一斉には上がれないような工夫がされています。両翼に伸びた石垣は、半円形に張出した形になっていて、敵に横から矢が射かけられるような仕組みになっています。また、ここには握りこぶし大の石が多くみられ、これは、戦国時代の伝統的な戦法の「つぶて」として用いられたと考えられています。井戸は箱型の石組で、底には粘土をひいた跡があります。真夏でも水深30cm程度の水があり、涸れることはないといわれています。また地元ではこの井戸について、感状山城が落城したときにまつわる伝説なども残されています。

歴史

感状山城が築かれた時代は、『播磨古城記』『岡城記』などによると、鎌倉時代(1192年～1333年)に瓜生左衛門尉が築いたとする説と、建武3年(1336年)赤松円心の三男赤松則祐(そくゆう)が築いたとする説があります。建武年間(1334年～1336年)、足利尊氏の追討をしていた新田義貞の率いる軍勢を赤松円心の三男則祐が奮戦し50余日にわたり足止めをした結果、足利尊氏の反撃の機会を与えることとなったことは歴史上有名です。この功績により足利尊氏が、赤松則祐に感状を与えたことから感状山と呼ばれるようになったといわれています。

感状山城は総石垣による曲輪の構えから考えると、当初からのものではなく、後世に手を加えたもので、戦国時代(1467年～1568年)にこの周辺を支配した宇喜多(浮田)氏の手によって改修されたものではないかという説もあります。

感状山城図面



感状山城現状図

(作図：角田誠)

播磨 赤穂城

赤穂城には、五層天守が建てられる予定であったとか。このため本の丸に残る天守台は、53,000石の外様小藩にしては規模の大きいものである。天守台に登ると本丸・二の丸・三の丸と城の中核部が一望に見渡せ、この城の規模に改めて驚かされる。

本丸には、櫓門の本丸門、厩口門が復元され、また本の丸御殿が平面的に復元され、当時の御殿の間取りが良くわかる。

赤穂城の縄張りは、輪郭式縄張りでは本丸と二の丸を同心円状に置き、北に三の丸を配置している。曲輪の配置よりも赤穂城は、山鹿流の甲州流軍学による縄張りとして有名で、折れや斜（ひずみ）を墨線に多用した複雑な縄張りである。

本丸以外に、二の丸・三の丸一帯が発掘調査が行われていて、随時復元・整備が進行中である。

三の丸の、大手門・隅櫓が復元されているが、大手櫓形は、左曲がりだが、本来は右曲がりでは櫓門が存在していた。ここも現在復元工事中で、右曲がりに石垣が組み直され、大手櫓門も復元される。行政の「城」に対する姿勢が福山市と大きく異なり、羨ましい限りである。

城の歴史

赤穂城は、慶長5年に関ヶ原の戦功により播磨姫路城主となった池田輝政の所領となり、重臣垂水勝重が現在の本丸・二の丸のところに陣屋造りの「掻き上げの城」を築いた。

赤穂城は、池田輝政の五男池田政綱が35,000石を領して城主となった。寛永8年、政綱が嗣子無く没し、政綱の弟輝興が佐用利神城から赤穂城主となった。

正保2年に池田輝興改易後、常陸笠間から浅野長直が入封し、慶安元年に幕命により、池田氏の陣屋を城に改築した。

浅野長直・長友・長矩と続き、元禄14年に浅野長矩は、江戸城松の廊下で高家の吉良義央に刃傷に及び、即日切腹。播州浅野家は断絶となった。

元禄15年12月、大石内蔵助を始めとして47名が、吉良邸に討ち入る。いわゆる「忠臣蔵」の物語だ。

浅野氏断絶の後、永井直敬、続いて宝永3年に備中西江原より森長直が2万石で入城した。森氏は、12代居城し、森忠義の時に明治を迎えた。(パンフレット参照)

矢野莊年表

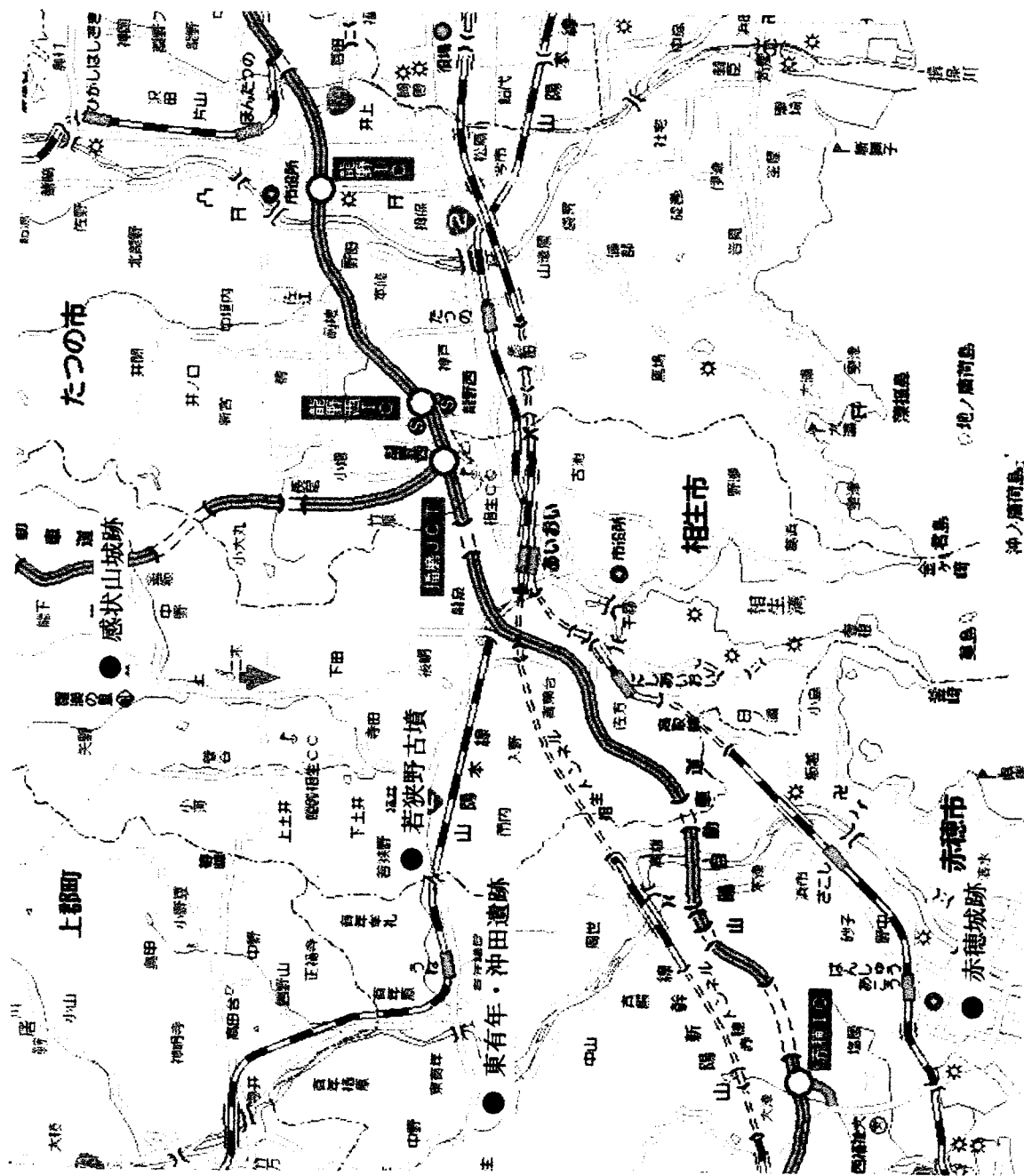
- 644? 秦河勝南波尺師浦二寄ル
864 秦内麻呂三濃山求福寺を建立
1016 藤原道長、摂政になる
1069 後三条天皇の荘園整理令
1071 秦為辰はたのためとき裁判で久富保の所有権を確保
1075 秦為辰赤穂郡司の地位を利用して、人夫の動員を国衛に申請
1083 後三年の役、源義家、三濃山求福寺を保護三濃千坊とよばれる
1086 白河上皇院政開始荘園を抑制する方針
1094~1110 藤原顯季播磨守となる
 秦為辰藤原顯季に久富保を寄進
 藤原顯季→藤原長実→女房二条殿→美福門院と継承される
1129 鳥羽上皇院政開始荘園を認める方向に転換
 鳥羽上皇のもとに膨大な荘園が集まる
1136 美福門院久富保を荘園にするよう申請
 久富保は「矢野莊」として公認される
 乳母伯耆局を領家とする
1156 保元の乱
1160 八条院矢野莊を例名と別名に分割別名を歎喜光院に寄進
1185 壇ノ浦の戦い平氏滅亡
 本補地頭を配置
1186 関東御家人海老名季能、姿を現す
 別名下司・開発領主・矢野馬次郎盛重とトラブル
 この頃、秦氏の後裔寺田一族、西国御家人となる
 寺田氏例名の公文職・矢野莊最大の重藤名・大避神社の神主・坂
 越莊の地頭職を保有
1192 源頼朝、鎌倉幕府を開く
1221 承久の変朝廷、幕府に敗北
 従来の地頭、惟宗氏一族承久の変で没落
1223 新補地頭を配置
 海老名氏地頭として移住例名地頭職浦分地頭職を保有
 未開発であった那波・佐方の開発が進み、
 惣莊（若狭野・矢野）と浦分（那波・佐方）のまとまりができる
1241 領家と地頭の争いが起こり、六波羅探題で裁決が下る
1253 藤原為綱惣莊領家職を息子範親浦分領家職を娘宇曾御前に譲る
1259 本家の安嘉門院、藤原範親の矢野莊例名領家職を承認する
1279 海老名季茂養子縁組で別名下司職を手に入れる
1281 元寇・弘安の役、御家人、鎌倉幕府に不満を持つ
1295 六波羅探題の仲裁で、那波・佐方以外の例名を下地中分する

- 地頭海老名泰季領家方雑掌左右衛門尉行方
寺田氏、下地中分で重藤名の四分の一を失う
領家分の管理をめぐり、寺田法念と預所職藤原冬綱が争う
- 1300 龜山上皇、矢野莊別名を南禪寺に寄進
室町時代矢野莊別名を南禪寺が支配
- 1313 後宇多上皇、全国 15 カ所の莊園を東寺に寄進
矢野莊例名が東寺に寄進される
東寺藤原氏の預所職を解任
沙弥道智を預所に任命し年貢を徴収させる
- 1314 寺田悪党の活動開始寺田法念在地領主として成長をめざす
南禪寺領の矢野莊別名に討ち入る矢野清俊の住宅を襲撃
寺田法念別名と例名の境界部分の田畠の支配をめざす
海老名季茂別名下司職をめぐって本家の南禪寺と争う
- 1317 後宇多上皇惣莊に加えて浦分と重藤名も東寺に寄進する
現地での支配を東寺に委ねる
寺田法念公文職を解任されるが、重藤名を支配し続ける
東寺法念を悪党と非難し、有力農民を組織して法念に対抗
- 1319 寺田一族東寺・有力農民連合群に敗北
- 1333 建武の新政
後醍醐天皇理由なく没収された本領は回復する方針を示す
東寺矢野莊例名・那波浦・佐方浦を安堵される
寺田範長例名公文職・重藤名を安堵される
- 1335 東寺と寺田一族の合戦
東寺、大避神社の裏山に山城を築く東寺・農民連合が勝利
寺田側の農民の名田を東寺側の農民に分配
- 1336 感状山城の戦い赤松則祐、新田義貞の軍を破る
- 1347 東寺の預所果宝重藤名を押領しようとする海老名季康と訴訟
重藤名を回復しようとする寺田一族と対決
両者との対決に東寺が勝利
- 1348 寺田範長東寺に重藤名と公文職に関する文書を売り渡す
寺田一族の没落
- 1350~52 観応の擾乱足利尊氏と足利直義の対立
- 1352 矢野莊公文藤原清胤は足利直義方について敗北
東寺藤原清胤の公文職を没収
守護赤松則祐も藤原清胤の公文職を没収、被官の飽間光泰を公文
に指名
東寺訴訟で対抗勝訴するが、守護が遵行しないために効果なし
- 1359 東寺代官の祐尊守護方と交渉
年貢四分の一を五年分と引き替えに東寺の支配を認めさせる

- 1361 春王丸（足利義満）白旗城へ逃れる
- 1363 祐尊農民と対立し、会計の不正を指摘される
- 1375 祐尊訴訟を続け、守護方と交渉公文職も東寺が回復
祐尊矢野公文職になる
- 1377 惣荘一揆矢野荘の農民、祐尊と対立
- 1378 祐尊失脚
- 1392 南北朝の合体
- 1427 正長の土一揆が波及守護の軍勢が取り締まりのため荘園に入る
- 1441 嘉吉の乱赤松満祐が將軍足利義教を殺す
山名氏が播磨の守護に
在地領主は守護との関係を強化荘園領主の影響力が低下
- 1456 東寺矢野荘の直接統治をあきらめる請負代官制を導入
- 1467 応仁の乱が始まる
- 1527 東寺への最後の年貢納入
戦国時代矢野荘は、宇喜多直家・宇喜多秀家の支配下に入る
- 1588 海老名氏在地領主の立場を維持できていた
- 1600 関ヶ原の戦い宇喜多秀家西軍の中心となり敗北
池田輝政姫路入城
- 1605 池田輝政海老名氏に文書提出を命令
海老名氏文書提出を拒否、尼崎へ去る
- 1609 池田輝政による検地完了
- 1617 矢野荘に残った海老名氏農民となり、村役人の道を歩む
相生村・陸村の庄屋となる



瓜生石の羅漢



編集発行

館属史探訪の会

〒720-0824 福島市多治米町5-19-8

電話・FAX (084) 953-6157